

リーディングDXスクール事業 第3回公開学習会

事例紹介①
多様な学びを保障する
特別支援教育の充実
を目指して

～誰一人取り残さない新潟市の取組～

新潟市立鏡淵小学校

教頭

木村 杏子

☆全校児童207名

(1年2学級 2~6年1学級、
特別支援学級
知的1 自閉症・情緒1 病弱2)

☆職員40名

☆新潟県

特別支援教育研究会の事務局

【通級指導教室】

- 発達障がい通級指導教室(まなび)
- 言語障がい通級指導教室(ことば)
- 難聴通級指導教室(きこえ)

新潟市立鏡淵小学校





1 院内学級（病弱特別支援学級）での取組

2 通級指導教室と連携した取組

Ⅰ 院内学級での取組



新潟県立がんセンター新潟病院

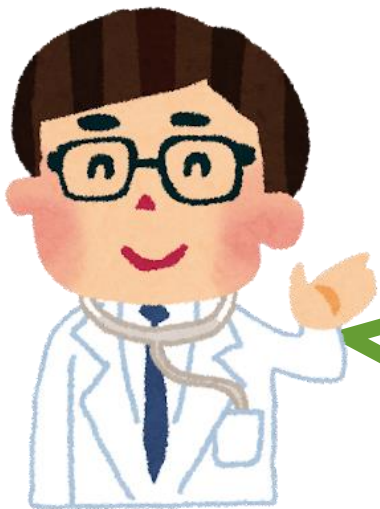
- ・平成13年 病弱特別支援学級（ひまわり学級）を設置
- ・新潟市には、小学校3校、中学校2校に院内学級が設置されている。

教室の様子



| | 時間 |
|-----|-------------|
| 朝の会 | 10:00~10:05 |
| 1校時 | 10:05~10:50 |
| 休けい | 10:50~11:00 |
| 2校時 | 11:00~11:45 |
| 昼食 | |
| 3校時 | 13:40~14:25 |
| 休けい | 14:25~14:35 |
| 4校時 | 14:35~15:20 |

- ・多くの子どもは白血病（8割が治る）
- ・長期入院（1年以上の子もいる）なので転籍して入級する。
- ・毎日、治療・検査の生活となる。



- ・学校は、入院生活にメリハリをもたらす。
- ・学習の喜び、向かう姿勢、友達との交流などが、病気の克服や、治療に向かうエネルギーになる。

院内学級の子どもたちの 学びを保障するために考えるべきこと

入院開始期

- ・ 家庭や学校、友達から離れる不安
- ・ 見通しのもてない手術・治療への不安

手術期

- ・ 骨髄移植後のクリーンルーム（無菌室）やセミクリーンルームでの学習の在り方

治療期

- ・ 学習の充実
- ・ 体調と相談しながらのフレキシブルな教育

退院期

- ・ 復学におけた学習の余白の有無
- ・ 復学に向けての原籍校との情報交換

端末を活用して

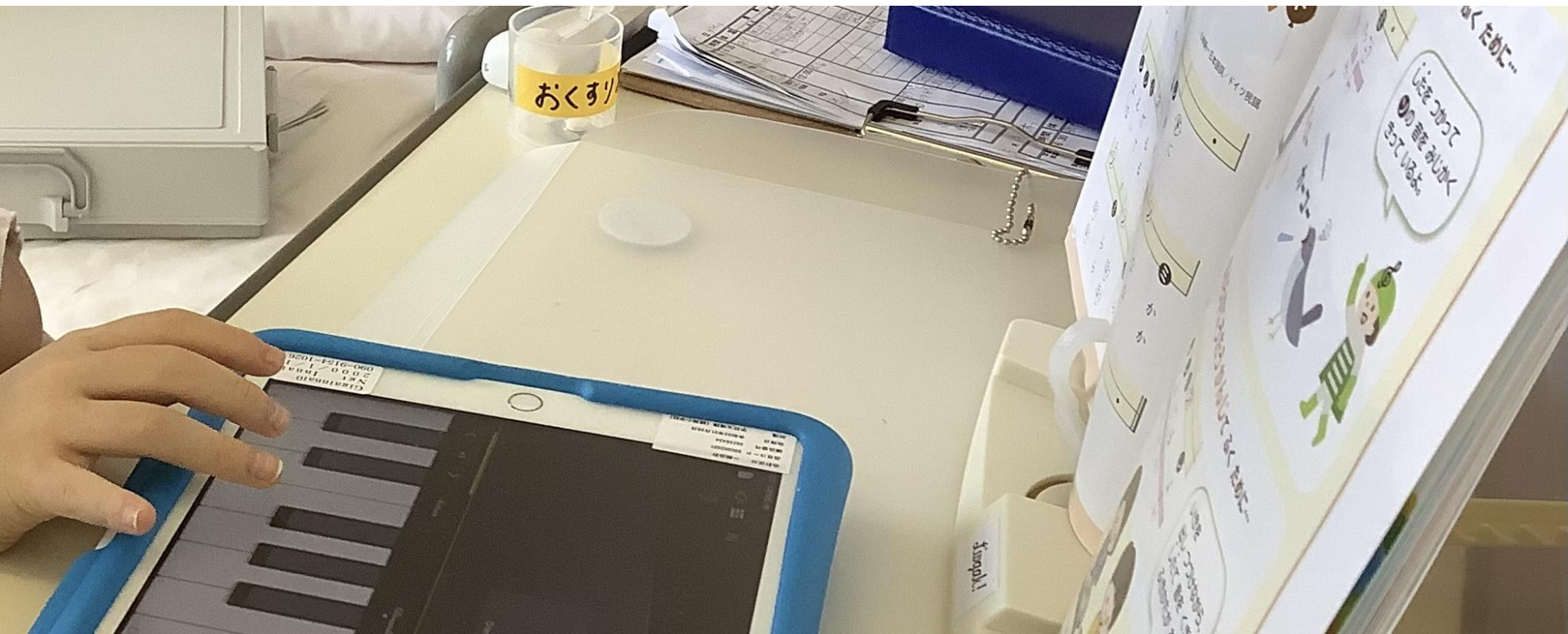
- 児童と保護者が望めば、原籍校の先生、友達ともオンラインでつないで、学習することが可能となっている。
- 児童がクリーンルームに入っている、一時退院で自宅へ帰っている、院内学級の担任が体調不良で病院に入れられない等、どんな場合でもオンラインを活用した学習ができるようになっている。



—
端末を活用して

- 音楽系アプリ、美術系アプリなど、多様なアプリを使うことによって、体験に近い学習ができる。友達とも共有できる。

- GoodNote5、OneNoteなどのデジタルノートを使うことで、復学した際にも学習したことの蓄積が残る。



これからの課題

- 原籍校とのつながりを切らないためにも、オンラインでの継続した取組は必要ではあるが、両校の理解がないと継続していくことが難しい。外見上の変化からも児童の気持ちを尊重しながら進める。
- 原籍校と新潟市が採用している端末やアプリが違うため、復学後も見れるようにするためには、データを個人のアカウントや端末に移す作業が必要になる。
- 体調や治療を優先した学習となるため、学習が途切れてしまうこともある。自分で学習をデジタル蓄積できるような練習とその伴走をしていく。

どんな状況にあっても学ぶことを楽しめる
そんなサポートをして
いきたい。



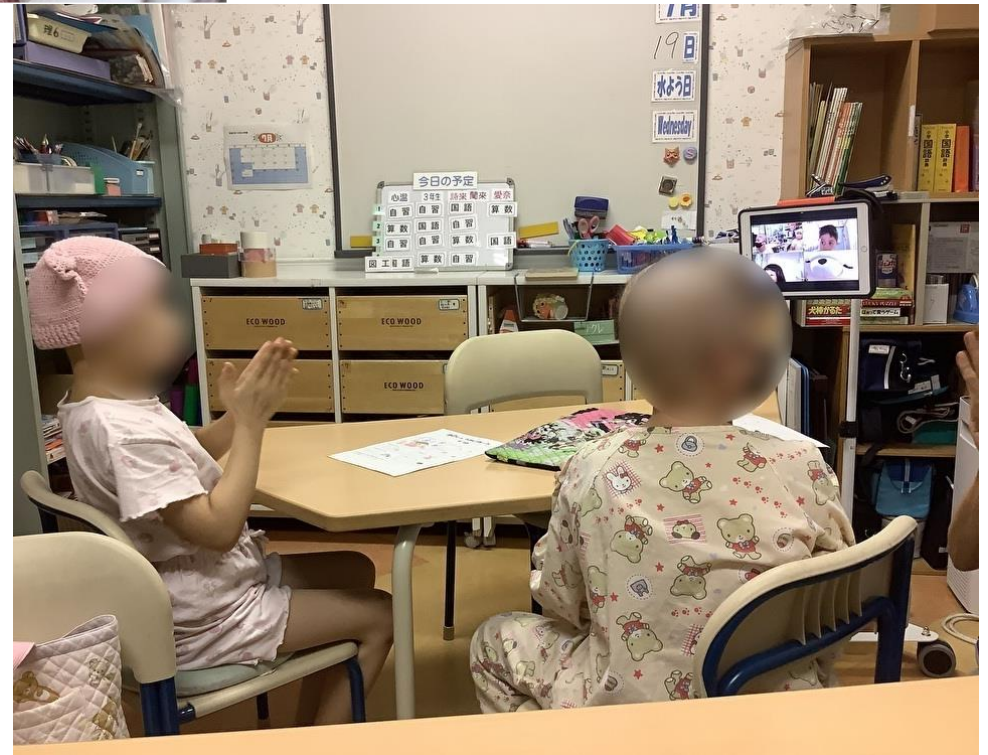
ICTありきではなく、
あくまでツールとして。
子どもたちの「好き」
に寄り添って学ぶ意
欲を育てる。





つながることは
希望になる
治療への
活力になる

一人一台端末はつながりを築く上で重要。情報を得る大事なツールとなる。





学び方を学ぶ
誰一人取り残さない

学習に困難さがある児童Aへの支援

① ② ③ ④

あま 草の ① ② ③ ④

み

⑤ ⑥ ⑦ ⑧

⑤ ⑥ ⑦ ⑧

⑨ ⑩ ⑪ ⑫

⑨ ⑩ ⑪ ⑫

⑬ ⑭ ⑮ ⑯

⑬ ⑭ ⑮ ⑯

⑰ ⑱ ⑲ ⑳

⑰ ⑱ ⑲ ⑳

㉑ ㉒ ㉓ ㉔

㉑ ㉒ ㉓ ㉔

㉕ ㉖ ㉗ ㉘

㉕ ㉖ ㉗ ㉘

㉙ ㉚ ㉛ ㉜

㉙ ㉚ ㉛ ㉜

㉝ ㉞ ㉟ ㊱

㉝ ㉞ ㉟ ㊱

㊲ ㊳ ㊴ ㊵

㊲ ㊳ ㊴ ㊵

㊶ ㊷ ㊸ ㊹

㊶ ㊷ ㊸ ㊹

㊺ ㊻ ㊼ ㊽

㊺ ㊻ ㊼ ㊽

㊾ ㊿

㊾ ㊿

は、かんじとおくりがなを書きましょう。

かんじ

めあ

かくしゅうした

個別の支援が必要だと分かっているけど・・・

- ・ 実際は担任だけではどうにもならない。
- ・ 対象児童において、何ができて何が難しいのか詳細までは見とれていない。
- ・ 校内支援会議で学校体制を組んでも、一人の職員が常に対応するのは、限界がある。



短期のゴールと簡単な方針を共有しておけば、誰が担当してもできる。概ね2週間を一区切りにした短期のゴールを担当が設定し、その日の担当者を特支Coが割り振り（Googleカレンダー）、担当者がそれに沿って支援。

- (1) スプレッドシートに学習の進捗状況、気付いたこと、効果的な支援を担当者が記入（teamsで共有）
- (2) OneNoteでワークシートやノートの写真などを共有（本人の「できた」の蓄積のために）

実践的やりとりから見えてきたこと ～個別支援担当者がteamsで共有した気付き～

- 身体の使い方がぎこちなく、不器用。本人も運動への苦手意識がある。見え方に特に問題はないようだ。
- 空間認知力が低い。
- 平仮名でも片仮名でも文字想起にかなり時間がかかる。
- 平仮名と片仮名の表記の使い分けができない。
- 画数の多い漢字を覚えられない。
- 読みは比較的良好。ただし、繰り返し出てくる漢字の読みは、覚えるまでに時間がかかる。
- 言葉の意味理解はできる。話言葉は豊富（おしゃべりな方）。
- 拗音、促音の書きに困難。マス目にも正しく入れられない。
- 虫など興味のあることは饒舌。
- 滑舌が悪く聞き取りにくい。聞こえには問題なし。
- できない自分が許せないため、がんばってしまう。友達にできないことを知られるのもいや。



自信をもって書ける漢字を増やすことにシフト

→何度も漢字を練習しても、努力があまりむくわれ
ない。ネガティブなストレスがずっと続いている状況。

読みから正しい漢字を選択し、書くようにしていく。自
分でデジタル漢字帳 (GoodNote5) を作成すること
を家庭学習としてはどうか。

書く負担を軽減し、将来を見据えて入力に慣れさせる

→音声入力がある。でも実際は滑舌が悪いと、うまく
入力できない。また、難しい漢字に変換されてしまう
ため、入力されても本人がそれが正しいかどうか分
からない。マイク付きのイヤホンがあるといいかも。仮
名フリック入力に慣れさせていくのが一番最短かも。
でも50音の配列、分かってるかな…。



私たちにできることは・・・

☆ 読み上げ機能

- ・写真に撮って読み上げ
- ・PDFにして読み上げ
- ・アプリを使って読み上げ (Seeing AI等)

☆ 拡大機能

☆ 音声入力・キーボード入力

☆ 学びの記録 (カメラ)

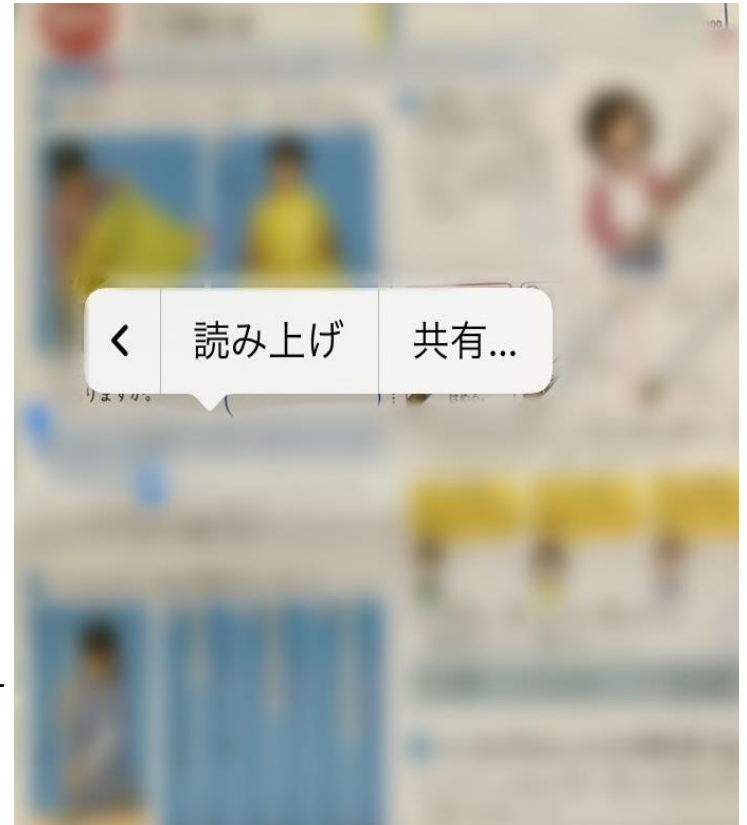
- ・写真や動画によるビフォーアフター
- ・プロセスの共有

☆ 家庭学習との連携

- ・自分で自分の教材を作る
- ・デジタルフォトポート

☆ 2画面

- ・空間認知の弱い子どもも机上整理ができる。



タブレット端末の機能を使って、自分で学習にアクセスできるように子どもたちに手渡していく



最後に

- どの子どもにも合うわけではない。発達段階やその子の特性に合わせての調整や自分に合うものを見つけるまでの伴走が必要。
- 特性のある子どもだけでなく、全員が選択できる状況を。そのためにはそれを使える教室の風土と教師が機能を知っておくことが必要。